

保育環境としての「自然」に関する一考察

—デンマーク・フィンランドの実践に着目して—

A Study on the Nature of the Environment in Early Childhood Education and Care

Focusing on the Practice of Denmark and Finland

柴田 卓* 柴田千賀子**

Suguru Shibata Chikako Shibata

This research summarizes the child care environment practice of Denmark and Finland which utilizes nature and natural settings. In the practice of Finland, the child, the child-care worker and the parents were clear in communicating the education contents. The viewpoints of all were considered when combining the child care and natural environment. From this, nature was chosen and thought most important. In the practice of Denmark, through interviews with the childcare workers in the forest kindergarten, we understood they specifically were conscious of the ability of the children to express themselves and to cherish their own values.

1. はじめに

筆者は、2004年より週末型の森のようちえんを実践してきた^{注1)}。子ども達が自らの感性や欲求を満たしながら遊びに没頭する姿や遊びが学びに変わる様を目の当たりにし、保育環境としての「自然」の可能性を探ってきた。実践をはじめて5年が経過した頃から、活動内容や子どもへの関わり、自然や森が子どもへもたらす効果など、様々な疑問を抱くようになった。こうした疑問に対する答えを見つけるべく、その発祥と言われるデンマークをはじめて訪れたのは2010年3月である。それ以来、デンマークとその周辺諸国であるフィンランド、スウェーデンの保育実践を訪問し、保育環境としての「自然」に着目した調査を継続している。

本稿は、森と湖の国と称されるフィンランドと森の幼稚園発祥の国^{注2)}とされるデンマークの2か国を取り上げる。フィンランドの事例からは、一般的な保育園でどのように自然を活かした保育が展開されているか、また、森を保育環境として実践している保育園の事例について報告する。デンマークの事例からは、2つの森の保育園を取り上げ、保育者へのインタビューから、それぞれの保育計画や保育内容、保育者の価値観等について報告する。2か国の事例から、その特徴について考察することを目的とした。

* 幼児教育学科 ** 仙台大学

2. 研究方法

本稿における報告は2015、2016、2017年に実施したデンマークおよびフィンランド調査の一部であり、対象施設は以下の4施設である。なお、本稿における幼稚園・保育園・プリスクールなどの名称については、デンマークは社会省、フィンランドは教育文化省の管轄であり、すべて保育園で統一した。調査に関しては、いずれも事前に訪問施設への承諾を得て行っていると同時に、他の調査でも数回訪問しており、研究に対する理解及び協力に関し、良好な関係を構築している施設である。それぞれの施設での取り組みや子どもの様子への視察および保育者へのインタビューを踏まえ、考察を加える。

【フィンランド】

- ①プロプイスト保育園 (PUROPUISTON PÄIVÄKOTI) 2016年8月、2017年8月視察訪問
- ②クリカクマルマ保育園「森の妖精グループ」(KURIKANKULMA PÄIVÄKOTI Luhtaröllit) 2017年8月視察訪問

フィンランドは、ニエメラペトリ氏、ニエメラみどり氏にコーディネートおよび現地語の通訳を依頼した。

【デンマーク】

- ①ステンリュース森の保育園 (Stenlose Skovbørnehaven) 2010年3月、2012年3月、2016年8月視察訪問
 - ②スコウボ森の保育園 (Skovbo Skovbørnehaven) 2015年8月、2016年8月視察訪問
- デンマークは、澤渡夏代ブランド氏にコーディネートおよび現地語の通訳を依頼した。

3. フィンランドの保育実践から

1) プロプイスト保育園 (PUROPUISTON PÄIVÄKOTI)

プロプイスト保育園は、フィンランド第2の都市タンペレ (Tampere) に隣接するノキア市 (Nokia) の公立保育園で、24時間型保育園が併設されている。フィンランドの保育では、子どもと大人の関係性が対等で、子どもが保育に参加することが保障されている。ここでは、子どもの保育実践への参加が実際にどのように展開しているのか、ひも解きながら保育環境としての自然 (森) の在りようを概観したい。

本園は、園児総数188名で、保育室は年齢ごとのグループに分かれており、各保育室に戸外につながる出入り口と、6畳程度の保育室が3室、昼寝用のベッドルームがある。視察した3歳児クラスの園児数は15名で、保育者は3名である。訪問時は5名の園児が出席しており、保

育者が3名であった。金曜日に訪問したのだが、この日は森に出かける日であるという。その経緯を担当の保育者に問うと、保育実践のカリキュラムは保育者に任されており、年度当初に保育内容について子どもと保育者で、意見を出し合い決めていくということである。このクラスは、曜日ごとに活動の内容を大枠として決めることを選択し、毎週金曜日に森に出かけることが決定されたという。森の中での保育実践は、保護者も重要なものとして捉えており、森に出かける金曜日は、森で過ごす時間を少しでも長くしてほしいとの願いから、通常よりも早く登園させる家庭が多いということである。訪問日は、夏期休業明けすぐであったため、欠席の園児が多かった。

登園した子どもは、自ら防寒着を身につけ森に出かける準備を始めた。以下、時系列に保育の実際を紹介する。

9:00

子どもは、自分のクラスの玄関で外出用の衣服に着替える。訪問時の8月は晩夏で、気温は10度程度。外気を自ら判断しながら衣服の着脱を行う。保育の内容を子どもと保育者で話し合い、その結果として森に出かけることが決まったという経緯から、子どもは自ら出かける準備に向かっていた。保育者は、森の中で使用する焚き火用具やおやつソーセージを準備しており、子どもに向かって準備を促す様子は見られない。



図1 園を出発する様子



図2 焚火の様子



図3 小川の様子

9:05

園から徒歩3分程度の場所に森が広がっている。到着すると、保育者は焚き火をおこし、その様子を子どもが傍らでみている(図2)。火からの距離などは子どもが自分で判断するため、保育者から指示が出されることは無い。火の近くでの過ごし方は、子どもに危険性を伝えたいうえで、どのように過ごすかを話し合っているという。子どもも大人も日々じっくり話し合っているためか、とても落ち着いて過ごしていることが伝わってくる。

9:40

森の中には小川が流れている(図3)。小川の近くには保育者が待機し、子どもが川の中まで入らないように、水の冷たさやぬかるんでいる状況を伝えていく。その間、焚き火ではソー

ソーセージが焼かれ、子どもは川遊び、木登り、ソーセージ焼きを選択して遊んでいく。丸太に腰掛け、ゆったりすることを選ぶ子どもの姿も見られ、のんびりする時間も大切にされていることが理解できる。

10:10

森の中でゆったり過ごす時、保育者が園に戻る準備を始めた。その姿を見て、子どもも保育者に寄って行く。森の中に限らず、フィンランドの保育環境において、大きな声で指示を出すことは殆ど見られない。ここでも、子どもと保育者が双方の姿をよく見て、状況を察して行動に移す様子を目にした。普段の保育の様子を保育者に問うと、話し合いや傾聴に費やす時間はとても多いが、指示を出すことはほとんど無いという。子どもと大人の対話によって保育が計画されているため、子どもは大人から何かを促されるという意識はなく、自分で決めたことに参加していくという流れが作られていることがみえてきた。

2) クリカクルマ保育園「森の妖精グループ」(KURIKANKULMA PÄIVÄKOTI Luhtaröllit)

クリカクルマ保育園は、タンペレ市(Tampere)に隣接するピルッカラ市(pirkkara)に位置し、2001年にスタートした公立保育園である。以下に視察した内容と副園長であるメンティラ氏へのインタビューを報告する。ピルッカラ市は、近隣の都市開発が進み人口が増えている町で、4つの公立保育園と1つの独立法人型の保育園がある。この保育園に通うのは3歳～5歳児で、定員は77名である。園の方針としてインクルーシブ教育を掲げており、特別ニーズの子どもだけでなく、難民のこどもを積極的に受け入れている。同敷地内には、就学前・1年生・2年生の学校が併設されている。また、保護者らが保護者会を立ち上げ、協力的な関係性を築いている人気の保育園である。

保育に関する特徴は、園全体ではなくグループ単位で違ったテーマに基づく保育を展開している点にある。例えば、施設内でモンテッソーリ教育を展開するグループや、森を保育環境とするグループ(森の妖精グループ)などがある。どのグループにするかは保護者と子どもが相談して選択する。グループで異なる保育実践を展開するメリットは、相互にその教材や環境を利用できる点にある。モンテッソーリグループは週に1回程度、森で活動する日が設定され、同グループが研修で得た情報や保育教材を森の妖精グループが活用することもある。このことは、子どもにも保



図4 副園長メンティラ氏
Tarja Mäntylä

育者にもメリットがあると副園長のメンティラ氏(図4)は語った。こうした、ユニークかつ柔軟な取り組みは、公立保育園を管轄する自治体と園の密接な連携が取れているフィンランド

保育の特徴でもある。

クリカンクルマ保育園森の妖精グループは、月曜日以外の週4日を森で過ごし、保育者2名に対し3歳から5歳までの15名が在籍している。森での活動時間は、概ね9時から15時の6時間程度である。冬季に関しては、気温-15℃が森で活動するか否かを判断する基準としている。過去には-32℃でも外で活動した日があったという。月曜日は体育の日として設定され、園舎内で運動やスポーツを実施している。それ以外の火曜日と金曜日は拠点とする森で過ごし、水曜日と木曜日は少し遠出をする「探検」に出かける。昼食に関しては、施設と同じ給食を職員や保育者が森へ運び、冬でも外で食べている。食事の内容は園舎の子どもと一緒に食べるが、割れにくい食器を使うなどの配慮がある。

訪問した日は、9時まで園舎(図5)で過ごし、その後森へ出発した。道路を挟んで向かい側に森が広がり、10分ほど散策路(図6)を歩くと拠点となる森へ到着した。コタと呼ばれる小屋(図8、9)が森の中央にあり、焚火をして暖をとったり、パンやワッフルを焼いたり、お泊り保育を実施するなどして使用している。森に着いた子ども達は東屋のベンチに集合し、安全に関する約束事を確認していた(図7)。その内容は、①遊ぶ範囲は、大人の見えるところまで、②緑の茂る奥の方は、大人となら行って良い、③石の上では押ししたりしない、④木の枝は、自分の腕の長さまで使って良い、という4つを確認した。最後に「どのように遊びますか?」と子ども達に質問すると、「安全に!」との返答があり、遊びの始まりの合図となっていた。



図5 クリカンクルマ保育園施設



図6 森へ向かう子ども達



図7 東屋で約束事の確認



図8 森の中央にあるコタ



図9 コタの中の様子



図10 秘密基地

探検や歩くスキーのコースには、子どもと一緒にポイントをつけ、そのポイントでは必ず待つというルールもある。その後、子ども達は一目散に広がり、木材を立てかけて作った基地の様なスペース(図10)、コタの入り口、岩場などで様々な遊びがはじまった。途中、副園長のメンティラ氏がループを取り出し、数人の子どもに渡すと、いろいろなものをループで覗き込んでいた(図12)。新しい発見があるたびに「博物館行きだね」とつぶやく子どもの声が印象的であった。訪問した日の前の月に遠足で博物館に行き来して以来、数名の子ども達が不思議なものを見つけては博物館(図13)に運んで展示するという遊びに没頭し、現在もなおこの遊びが継続しているという。他にも、意図的に自然を活用したアクティビティを取り入れている。図14は、目隠しの状態で、あらかじめ設定されたコースのロープと自身の腰をカラビナで連結し、ゴールまで進むというアクティビティである。その際、コース上には草や枝など自然の障害物があり、それが何なのかを想像し、どうやって回避するかを判断しながら進むというねらいがある。図15は、トイレットペーパーの芯を使用して作成した望遠鏡のようなもので、仰向けになって空を眺めるといふ雲についてのアクティビティである。図16は、バランス感覚やチャレンジ精神を養うためのアクティビティである。こうした自然や季節を取り入れたアクティビティを必要性やタイミングを見計らって取り入れているようである。

自然を保育環境とする上で大切にしていることやカリキュラムに関しては、ナショナルカリキュラムに沿って文字や数字、音楽などにも触れるようにしている。自由活動だけでなく、自然を活用したさまざまなアクティビティを考え、教員主導の活動も取り入れるようにしている。

子ども達の様子に関しては、サウナ遊び、博物館ごっこ、フクロウプロジェクトなど想像力を発揮して遊びを創り出す力がついている。日頃から子どもの興味・関心を探り、子どもの声を聞くことを大切にしている。「大人は会議があるのに、子どもにはないのか」という子どもの声を受けて、子ども会議を実施した。そこで、運動遊びや年2回実施する遠足の場所と内容などについて子ども達から提案があがり、可能な限り取り入れるようにしているとのことである。



図11 昼食の様子



図12 ループで何かを発掘中



図13 博物館



図14 目隠しのアクティビティ



図15 空を観察している様子



図16 挑戦系のアクティビティ

自然を保育環境とすることで、病欠する子が減少し、身体能力、持久力、食欲など健康に関連する能力が高いと実感している。インタビューの途中、メンティラ氏が「特別な場所を見せてあげる」と言い、「あんずだけ」(フィンランドで最もメジャーなキノコ)の生息地を見せてくれた。最後に、「自然を保育環境とするメリットは教員にもあり、森はストレスが少なくなること、居心地のよい環境であること」と付け加えてインタビューが終了した。

筆者は森を保育環境とするデンマークの森の保育園、スウェーデンのアウトドア環境教育の実践など、自然や屋外を保育環境とする保育実践に着目していた。フィンランドでは、ほとんどの保育園で午前と午後の2回、外遊びを取り入れていることは既に確認していた。しかし、冬季になると -20°C を超える過酷な自然環境から、デンマークの森の保育園のように毎日を森で過ごす保育園の存在は確認できていなかった。今回のクリカクルマ保育園視察により、フィンランドにおいて森を保育環境として毎日保育が展開される園の存在を明らかにすることができた。このことで、ナショナルカリキュラムとの関連や職員研修、自治体との連携など今後も継続して調査を深めるべき視点と課題が見えてきた。

3) 考察

フィンランドの保育では、子どもの保育計画への参加が重要視されている。日々の保育実践の内容はナショナルカリキュラムに沿って計画されるが、如何に実現するかということに関しては、子どもの声が実践に色濃く反映される。これは、保育者の専門性としての子ども理解が重視されているということでもある。ここで用いる子ども理解とは、決して子どもの全てを大人が解るという意味ではない。秋田(2009)は、子ども理解に焦点を当てた子どもと大人の関係性について、「大人とは異質な他者としての子どものわからなさへの畏れ、秘密への魅力、わかろうとしつつも、わからなさに気づいたときに、保育が教え学びから、共にはぐくみ合う関係性へと変わる」²⁾と述べているが、フィンランドの保育者の子どもへのまなざしは、まさに「子どものわからなさへの畏れ」を有し、尚且つそれらを面白がるということで、計画に書き尽くせぬ保育の展開に、そして子ども理解の複雑さに対応しているといえる。本視察から見えてきた、保育環境としての「自然」の存在は、単に自然の中で身体を動かすことを推奨する

ものでも、自然を賛美する思想に依るものでもなく、子ども時代を過ごし、心身の豊かな発達を助長する環境として、多様な学びの可能性にあふれた「自然」という場の必要性を、保育者、保護者、そして子ども自身が対話を重ねることで見出しているものである。浜田(2009)は『子ども学序説』³⁾の中で、大人は文化に浸かっているがゆえに「子どもの自然」を忘れると警鐘を鳴らしている。フィンランドの保育者は、子どもとの対等な関係性と対話の重なりの中で、子どもが享受する「自然」という環境を忘れることなく保障しているのではないだろうか。

4. デンマークの保育実践から

1) ステンリュース森の保育園 (Stenløse Skovbørnehaven)

ステンリュース森の保育園は、シェラン島の古都ロスキレ市 (Roskilde) から車で40分ほどに位置するステンリュース (Stenløse) にある森の保育園である。2016年8月の訪問で3回目の訪問となり、その間に自治体が管轄する公立保育園からプライベート (独立法人型) へ移行している。園の特徴としては、送迎用のバスを所有しており、7時から9時と15時から17時までの集合と解散の時間帯を協力関係にあるステンリュースプライベートスクールで過ごしている。活動場所は特別な場合を除いて拠点とする森であり、集合場所からバスで20分ほど走った先にある。平均5時間程度をその森で過ごし、またバスに乗って集合場所へ移動するという形態である。現在定員は28名で、5名の保育者が在籍している。

図17は、協力関係にあるステンリュースプライベートスクールの一角で、子ども達が集合す



図17 集合の様子



図18 バスに乗り込む子ども達



図19 バスでの様子



図20 トレッキングの様子



図21 倒木を観察する様子



図22 焚火とおやつ時間

るまでを過ごしている様子である。子ども達が集まったところで、バスに乗り込み移動する。前回の視察からバスが新しくなり、キッチンやトイレといった設備を完備していた(図18)。バスに同乗すると、向かい側に座った子どもがリュックの中にある持ち物を見せてくれた(図19)。着替え、おやつ、お弁当、水筒、昨日拾った宝物(木の実)である。20分ほどで森の入り口に到着すると、現地集合の子どもと保護者が待っていた。合流して間もなく、目的地へのトレッキングがはじまった(図20)。途中、モグラの死骸を見つけたり、倒木をひっくり返して何かを探したり(図21)と、様々なものに興味・関心を示しながら歩いている。30分ほどで普段活動する森に到着した。数人の子どもが薪を拾い始め、焚き火を囲んでおやつの時間(図



図23 それぞれに遊ぶ子ども達



図24 笛づくりに挑戦する様子



図25 おやつの時間

22)となる。全員揃うでもなく食べはじめ、食べ終わった子どもから、それぞれにやりたい遊び(図23)をはじめた。木登りを楽しむ、鬼ごっこを楽しむ、かくれんぼを楽しむ、保育者が用意した小枝の笛づくりに挑戦する(図24)、寝ころんでゆっくりおやつを食べる(図25)など多様である。この日、保育者による意図的な活動は、男性保育者が用意した笛づくりだけである。その際も、道具の使い方と作り方を示す程度で、その後は子ども達だけで制作していた。デンマークでは、一人の人間として子どもを尊重し、子どもが持っている力を信じて見守ることが当たり前とされている。このような関わりが、自然環境を最大に活用しながら保育を実践するための鍵となることが見えてきた。

以下、園長イェンセン氏へのインタビュー内容である。

ステンリュース森の保育園の理念は「自然を通して総合的に人間性を育むこと」であり、ナショナルカリキュラム^{注3)}に沿って保育を展開している。子どもたちの様子は、精神的に健全であり、騒がしい時もあるが安定感がある。例えば、薪を拾って運ぶ場面では、バランスよく持つためにはどうしたらよいか、人にぶつからないように運ぶためにはどうしたらよいかなど、常に創造力と判断力が求められる。森の中は不安定な場所や物にあふれ、何気ない小さな事でも常に選択



図26 園長イェンセン氏
Charlotte Jensen

や判断が求められる。こうした日常的な生活や遊びの中で、創造力を発揮する経験を積み重ねることが安定感に繋がっている。

保育計画に関しては、年間行事としてインディアンデイやクリスマス等の行事は決まっており、2週間程度の予定は作成するが細かい計画表などはない。今日の笛づくりも男性保育者のアイデアであり、造形や木登りなどの運動は、それぞれのスタッフが子ども達の興味・関心に合わせて実施している。ナショナルカリキュラムの中で意識しているのは「社会的能力の発達」である。「言葉の発達」を促すことで、社会的能力に繋げている。言葉を理解し対話ができるようになることで、自分を表現することができるようになる。「自分を表現するために必要な力をつけることが最も大切である」と力強く語った。

2) スコウボ森の保育園 (Skovbo Skovbørnehaven)

スコウボ森の保育園は、コペンハーゲンから電車とバスで約1時間の場所に位置する森の保育園である。1994年に地域の国民学校に勤めていた教員が退職し、自然の活動を大切にしたい保育を目指して少人数ではじまった保育園である。現在は、定員28名であり保育者は5名である。

保育の様子に関しては、柴田2016⁵⁾で取り上げたため、本稿では主任のグランダル氏へのインタビューから、保育計画・保育内容および保育観について報告^{注4)}する。

年間の主な行事は、6月にバーベキューの日、8月にワーキングデイ、9月に祖父母の日、12月にクリスマスの準備など概ね決まっている。季節に応じた活動は決まっているが、日本の月案・週案・日案にあたる細かい計画はない。保育内容に関しては、ナショナルカリキュラムの視点から、「文化的表現方法と価値」に関して、2週に1度のペースで音楽家が来て演奏や歌に親しみ、机に座って絵を描くこともある。「健康と運動」に関しては、木登りやかっこ、ボール遊びを実施している。「言葉の発達」に関しては、韻を踏むなど、遊びながら取り入れるようにしている。決められた時間や内容があるわけではなく、最善のタイミングと内容を見計らい、即興的に取り入れることが多い。0学年に向けて早めに学校に行って慣れさせている保育園もあるようだが、話を聞く力や自分を表現する力を養うなど、この時期にやるべきことをやればよいと考えている。子どもの意見や主張に耳を傾け、対話を重ねることが子どものコミュニケーション力に繋がっている。その点に関しては、0学年のベタゴー^{注5)}と密接に連携を図り、卒園後の様子を把握するようにしている。スコウボの子ども達の評価は全体的に良く、興味・関心やモチベーションが高く、聞く力があり、コミュニケーションがよく取れるとのことである。



図27 主任のグランダル氏
Robert Grandahl

子どもと関わるうえで特に大切にしていることは、セルヴェア (selvværd)^{注6)}である。セルヴェアとは、デンマーク人にとって重要な概念であり、自分自身の価値を理解する・自分の存在を肯定的に捉えることである。例えば、喧嘩や揉め事があってもその行為を考えさせ、相手との対話を重ねていけるように援助する。そうすることで、子どもは自己を否定することなく、自分自身の価値や相手の価値を理解していくのである。

3) 考察

日本においても、オルタナティブ教育としての「森のようちえん」が注目を集め、ここ数年で新たな実践や研究が増加傾向にある。身体的効果や環境教育の視点、地域活性化など日本独自の視点で発展している。本稿では、森の保育園が発祥と言われ、選択肢の一つとして定着したデンマークの実践に着目した。二人の実践家へのインタビューで共通していたのは、保育計画や保育内容に関することである。保育計画に関しては、年間の大枠が決められている程度で細かい計画は決まっていない。森で過ごす子ども達には、ゆったりとした時間が流れていて、だからといって放任ではなく充実した活動や遊びが展開されていた。

コペンハーゲン市が保育士を対象に作成した学びのプランマニュアル (Pædagogiske læreplaner i daginstitutionen) 「人間関係・社会能力」の中に「保育園で何がしたいか自分で決めること」⁸⁾という一文がある。このことは、自分でやりたいことを自分で決めると同時に、やりたいことを自分で計画することでもある。つまり、保育者がすべてを計画するのではなく子ども達との対話を通して、今ここにある興味・関心に寄り添い、子ども達のやりたいことを尊重し、子ども達が自分で計画するための余白を意図的に残しているのではないだろうか。このような保育観に立つからこそ、イェンセン氏からは「自分を表現するために必要な力をつけること」が強調され、スコウボのグランダル氏からは、自分自身の価値を理解する・自分の存在を肯定的に捉えることとしての「セルヴェア」が強調されたのだろう。デンマークにおいては一般的なことかもしれないが、非日常で特別な存在としての自然ではなく、日常的な保育環境として自然を捉える二人の実践家の言葉と子ども達の様子から、このことが際立って見えてきた。



図28 コペンハーゲン「学びのプランマニュアル」の表紙

5. おわりに

フィンランドやデンマークの保育実践には、保育環境としての「自然」が多様な形で保障されている。本稿では、いわゆる森の保育園と呼ばれる保育形態と、保育計画の一部に森での活動が含まれる形態からの論考を試みた。ここで見えてきたのは、オルタナティブな実践として「自然」という環境が保育に組み込まれているのではなく、あくまでも一般的な選択肢の一つとして「自然」が捉えられているということである。そして、そこで注目されるべきは、子どもと保育者、保護者が保育実践の中で対話を重ね、それぞれが主体性をもって保育環境の構成に参加しており、その中で「自然」という環境が選択されているということである。わが国に視点を移すと、保育環境として語られる「自然」は、非日常であり特別に扱われることが多く、何より子どもの声が保育の環境構成に届けられることが難しい状況である。このような現状において、子どもと大人の対等な関係性と対話の重なりの中で、子どもが享受する「自然」という環境を保障している実践事例から学ぶ意義は大きいと考える。そういった意味で、本報告がわが国の保育環境としての「自然」への理解の深まりを助長する可能性の一端でも示すことができたと期待したい。

注

- 注1) 自然学校キッツ森のようちえん(2004年設立)は、宮城県・福島県を中心に幼児を対象とした森のようちえんと小学生以上を対象とした自然学校である。詳細はホームページ参照 <https://www.kits-no-mori.com/>
- 注2) 森の幼稚園発祥に関する報告は多数ある。本稿は澤渡2005¹⁾を参考にしてている。
- 注3) デンマークのナショナルカリキュラムは、日本の5領域に類似した6項目が設定されている。「子どもの総合的人間形成(個の確立)」、「自然と自然現象を知る」、「健康と運動」、「言葉の発達」、「社会的能力の発達」、「文化的表現方法と価値」⁴⁾である。この6項目を踏まえ、各自治体が保育園や保育者に向けてガイドラインを作成し、保育活動が展開されている。
- 注4) ステンリュース森の保育園、スコウボ森の保育園の概要は、文献6第4章で報告した。本稿は、その内容をより詳細に提示し、かつ筆者による考察を加えて整理したものである。
- 注5) ペダゴグ(Pædagog)とは、保育施設、国民学校0学年クラス、学童保育施設、青少年余暇センター、社会福祉施設など多岐にわたる場において、子どもから成人の多様なニーズに対応し、円滑に社会生活を送ることができるよう支援する専門職⁶⁾である。
- 注6) セルヴェア(selvvaerd)に関しては、グランダル氏の解説をもとに説明しているが、櫻谷2015⁷⁾

の説明も参考にしている。

文献

- 1) 澤渡夏代ブ兰特『デンマークの子育て・人育ち「人が資源」の福祉社会』大月書店, 2005.
- 2) 秋田喜代美『保育の心もち』ひかりのくに, 2009.
- 3) 浜田寿美男『子ども学序説』岩波書店, 2009.
- 4) 青江知子・大野睦子ビャーソウ『個を大切にするデンマークの保育 パピロン総合保育園から学ぶ』山陽新聞出版センター, 2010.
- 5) 柴田卓「スウェーデン・デンマークの保育環境に関する一考察」郡山女子大学紀要, 第52集, PP191～206, 2016.
- 6) 谷雅泰・青木真理編『転換期と向き合うデンマークの教育』ひとなる書房, 2017.
- 7) 櫻谷真理子「個を大切にするデンマークの保育に学ぶ ―自立性と自己決定を重視した実践―」立命館産業社会論集, 第51巻, 第1号, 2015.
- 8) 前掲⁴⁾

付記

本研究の一部は、科研費(課題番号15k04536)の助成を受けたものである。
また、本論文の一部を日本自然保育学会第2回大会において発表している。

